双葉郡〔第一部〕〔終戦後の混乱時代〕

片寄洋一

福島県双葉郡富岡町、太平洋に面した純農村地帯である。みるべき地場産業はなし、特産品といえるような産物はなし、豊かな漁場として有名な相馬沖と常磐沖の間にありながら，現在は廃港になったが日本一小さな漁港で有名になった小良ヶ浜漁港とは名ばかりの個人が掘ったトンネルと砂浜があるだけの誠にユニークな舟置き場、小さな漁船があるだけ、地域の人達の食卓にのるだけの漁獲しかなかったが、それで満足していたような誠にノンビリとした極々平凡な純農村地帯であり、ごく平凡な田舎町‘富岡’そして北関東経済圏に入る磐城地方と仙台経済圏に入る相馬地方、その中間に位置しいずれにも属さないまさに天領的な双葉郡。

この指標は常磐線の時刻表を見れば明らかで、上野～いわき（平）間。仙台～原ノ町間の 2 極に別れ､常磐全線で最も本数が少ないのはこの区間となる。

太平洋戦争では、精神的、経済的な被害は大きかったが、太平洋に面していながら直接的な被害は全国的にみればそれほどの被害は受けなかった。

戦後になって全国的に超インフレと食糧難が襲いかかってきたが、農村なるが故に自給自足経済で賄えたし、突如として塩焚き（製塩）という一大ブームがわき起こり､仏ヶ浜の砂浜を埋め尽くす塩焚きの竈が出現し､町を挙げての産業になった。

この現象は富岡ばかりではなく､双葉郡全体の砂浜が塩焚き竈で埋め尽くされた。

大熊町の第一原発がある陸軍飛行場跡地前の砂浜も塩焚き竈が並んでいた。

この現象は瀬戸内地方の塩田が空襲で壊滅的打撃を受け製塩が停止ししてしまったが故に、塩が欠乏し俄製塩業が各海岸で起きたことによる。

富岡駅には列車が到着すると担ぎ屋と称する行商人が降り立ち、駅に近い利便性で仏ヶ浜の塩竈に塩を買い出しに来て、居ながらにして飛ぶように売れ、我が世の春のような好景気がほんの一寸の間息ずいた。

しかし、長続きする産業ではなく、イオン樹脂交換の製塩法が開発されると急速に衰退し、さらに岩塩が輸入されるようになると文字通り‘アッ’というまに消えてしまい瞬間的なブームでしかなかった。

また物資不足の緊急事態に川内産の木炭が首都圏に大量に運ばれ、富岡駅貨物構